近世・近代における中国山地の開発とタタラ製鉄

徳　安　浩　明（洛星高校）

美作国西々條郡上斎原村では，18世紀中頃の樋ヶ谷鉄山の稼業にあたって，村方住人の7人に1人がタタラ製鉄に関わる労務に従事していた。3つの鉄山が同時に稼業された幕末において，この従事率はさらに高かったであろう。そして，荷物継立問屋やタタラ製鉄の経営を始める村方住人も存在した。近世中国山地の一般的な百姓像は，「タタラ製鉄に関わる荷物輸送や鉄穴流し，炭焼きなどと農業を兼業する人びと」としてまとめられる。

タタラ製鉄廃絶後の上斎原村遠藤では，基盤となる経済活動をタタラ製鉄→炭焼き→林業労務と変化させつつ，水田開発や牧畜もなされた。さまざまな経済活動を複合させることによって，近世のみならず近代においても山地の開発が進められてきたのである。

山地に位置する途上国の開発について個々の集落ごとに検討し，そのあり方をさぐる際にも，山地資源に依拠した経済活動の複合に視点をあてることが重要である。